

# NMSH TOPICS

— VOL.9 2017/8月 —



汲田 伸一郎 院長

## 今月の院長のイチオシ! 『消化器外科』

診断から治療まで、チームが一丸となって  
迅速かつ質の高い医療を提供

**全消化管・消化器疾患を  
総括的に捉えた診断から  
治療、フォローアップまで**

当科では食道から直腸肛門に至る全消化管、肝胆膵と脾臓を含めた腹腔内臓器を取り扱っています。臓器も疾患も多岐にわたっていますが、それぞれの臓器別に診療グループを構成し、各分野の治療成績の向上と後進の育成をめざして日夜努力しています。

密接に関連し、機能する各臓器を総括的に捉えるために、それぞれの専門グループは他のグループと常に連携を取りながら、一人ひとりの患者さんをトータルに診ていくことを大切にしています。

また地域医療を担当される病院、診療所との綿密な連携体制を保ちながら、常に患者さんの立場を考えた丁寧な診療を心がけています。連日の外来にはすべての消化器外科に精通する経験豊かな専門医が対応。治療後の患者さんのフォローアップは病診連携ののち

り、紹介医と緊密に連絡を取り合い、親切をモットーにきめ細かく行っています。患者さんはもちろんのこと、紹介してくださる先生方にも満足していただけるような、責任ある診療を心がけています。

年間約1400人、1日平均90人前後の入院患者を常時診療し、年間の手術件数は、食道手術約30件、胃切除術約110件、大腸切除術約200件、肝切除約60件、膵切除約80件、腹腔鏡下胆のう摘出術約200件、ヘルニア手術約100件、ほか多くの緊急手術などを含めると、約1200件の手術を行っています。

従来の開腹・開胸手術に加え、腹腔鏡下手術や胸腔鏡下手術といった医療技術の進歩による低侵襲手術に関しても、正しい適応のもとに数多く行っています。

当科での対応が必要な患者さんがおられましたら、お気軽にご紹介ください。



各々の診療グループと連携を取りながら、高度な医療の提供と後進の育成に取り組んでいる



## 化学療法科



化学療法科 部長  
清家 正博

1992年日本医科大学卒業後、同大学第4内科（現・呼吸器内科）入局。アメリカ国立がん研究所(NCI)留学などを経て、2011年日本医科大学大学院呼吸器内科分野准教授。2015年から化学療法科部長を兼任。肺がんとがん化学療法が専門分野。

### 安全・快適ながんの外来化学療法で 患者のQOL向上をめざす

POINT  
1

月 1000 例を超える治療実績を有する  
外来化学療法室の運営とマネジメントを担う

POINT  
2

週 3 回の外来で、原発不明がん、希少がん  
重複がんに対する診療を実施

POINT  
3

難治性がんや化学療法に対するコンサルテー  
ションやセカンドオピニオンを実施

### 専門的知識を持つ医師、専任の薬剤師、 看護師がチーム医療で対応

最近では、がん化学療法を  
通院しながら外来で受けるこ  
とが一般的になっていますが、  
当院は平成16年という早い段  
階で「輸液療法室」を設置し、  
外来化学療法を開始しました。  
がん診療連携拠点病院となっ  
てからはさらにそのニーズが  
高まったため、外来化学療法  
室の運営・マネジメントを担う  
当科を平成21年に開設。抗がん  
剤のレジメン審査・登録も役  
割としています。

現在、当院が手がける外来  
化学療法は、月間1000例  
以上（平成27年4月～28年3  
月）。中でも長期にわたって治  
療を受け続ける患者さんが増  
えてきました。それらを安全  
確実に施行するため、26床の  
外来化学療法室には当科の医  
師2人（いずれも日本がん治療  
認定医機構がん治療認定医）の  
ほか、専門的な知識を持つ薬  
剤師4人と看護師9人、看護  
助手1人が専任で配置されて  
います（平成29年6月時点）。

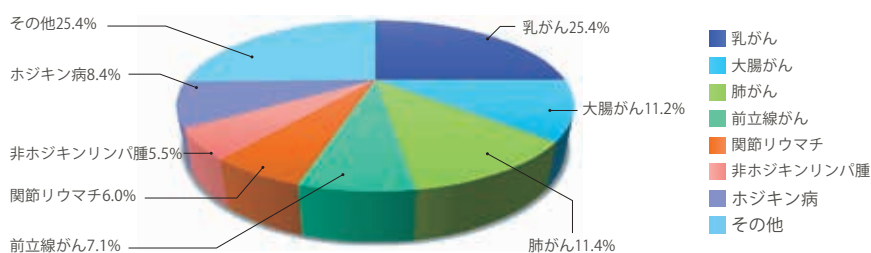
平成27年には化学療法科の  
外来診療も開始。一般的にが  
んの診療では、肺がんなら呼  
吸器内科・外科、胃・大腸がん  
なら消化器内科・外科と診療科  
が決まっていますが、複数の  
臓器にまたがる重複がん、原  
発臓器が不明の原発不明がん、  
専門家がいないような希少が  
んなどは、診療できる科が見  
つからないこともありました。  
当科ではそれらのがんを外来  
で診療し、必要であれば化学  
療法を実施しています。

さらに難治性がんや化学療  
法に対するコンサルテーショ  
ンやセカンドオピニオンも受  
け付けています。外来診療は  
月・木・金曜の週3日開設して  
いますが、当院の各診療科は  
もちろん、他院からも多くの  
紹介やコンサルテーション、  
セカンドオピニオンの依頼が  
あります。紹介診療科を迷わ  
れるようながん症例や化学療  
法の相談症例がありましたら、  
ぜひご紹介ください。



外来の化学療法室。日常生活を送りながら治療を  
続けられる

疾患別実施延件数（2004/5/24～2016/2/29：総数 75509 件）



## 放射線科



放射線科 部長  
**汲田 伸一郎**

1986年日本医科大学卒業。2006年から日本医科大学放射線医学教授、日本医科大学付属病院放射線科部長を兼任。2017年2月に日本医科大学付属病院院長就任。専門は放射線画像診断、SPECT/PET診断。

### 最新の画像診断を提供し 地域医療機関のニーズに応える

POINT  
**1**

あらゆる疾患に対して新鋭の診断機器を駆使し  
 迅速・正確な画像診断を実践

POINT  
**2**

癌や血管病変に対する  
 非侵襲的なカテーテル治療に対応

POINT  
**3**

当院に近設した健診医療センターで  
 PET 検診を通じた癌の早期発見を実践

### あらゆるモダリティを用いた 迅速かつ正確な診断に対応

当院の画像診断モダリティは、CT、MRI、SPECT、PET、マンモグラフィと多岐にわたっています。各モダリティとも新鋭機器を用いた最新画像を提供しており、検査数も外来・入院患者さんに対応し膨大な数となっています。しかしながら当科には20人以上の放射線診断専門医が在籍しており、いずれの検査も当日中に診断を行っています。そのためご開業の先生方から患者さんのCT検査を依頼された場合にも、当科外来にて即日検査を行い、診断結果をその場でお渡しすることができます（MRIに関しては、脳MRIのみ対応可能）。さらに当科にはIVR（血管内治療）部門があり、大動脈瘤のステント治療や癌疾患に対する抗癌剤治療などを行っています。また治療以外にもCTガイド下生検を行っています。最も汎用されているのが胸部エックス線撮影やCT検査で

発見された肺結節に対する生検。CT装置で体の断面像を見ながら肺病変に生検針を刺して組織を採取し、それを病理・細菌検査に提出した上で治療方針を決定します。同検査は一泊入院でできますので、外来IVR担当医にご相談ください。

当院に近設した日本医科大学健診医療センターでは3台のPET/CT装置が稼働し、保険診療として癌症例の転移・再発検索を行う他、癌の早期発見のための検診も行っています。同センターにおける年間検診人数は国内最多レベルで、見つかった癌症例のうち96%が早期癌というデータが得られています。

迅速な画像診断から非侵襲的血管内治療、そして検診に至るまで、近隣の皆さんに広く利用していただける施設をめざし努力していきますので、ご支援のほどよろしくお願いたします。



直径5mm以上の肺結節であれば、CTを撮像しながら、針生検を行うことができます



日本医科大学健診医療センターでは、保険診療検査以外にも各種検診目的のPET検査が受けられる

放射線科		外来診療担当
月	村田 智	IVR (抗がん剤治療)
火	村上 隆介	画像診断
水	上田 達夫	IVR (CTガイド下肺生検)
木	保坂 純郎	静脈瘤治療
金	汲田 伸一郎	画像診断
土	担当医	

## 放射線治療科



放射線治療科 部長  
前林勝也

群馬大学医学部卒業。2016年4月、日本医科大学付属病院放射線治療科部長に就任。日本医科大学放射線医学教室臨床准教授。日本医学放射線学会放射線科専門医。日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会放射線治療専門医。がん治療認定医。

### 新しい治療法を積極的に取り入れ 患者の体に優しい治療を実践

POINT  
1

化学療法と放射線治療の併用など新しい方法を含め、QOLを維持する優しい治療を推進

POINT  
2

がんに関わる多くの診療科と合同カンファレンスなどで連携し、適切な治療選択を行う

POINT  
3

放射線の物理的品質管理や照射を行う専門のスタッフをそろい、高精度な治療を安全に実施

### 科内の専門スタッフによる連携と 他科とのチーム医療で体に配慮した治療を

放射線治療は、手術に比べて臓器とその機能の温存が図りやすく、QOLを維持しつつ治療することが望めます。放射線治療科は、放射線治療を安全に適切に提供すること、抗がん剤や分子標的薬と放射線治療の併用など、新しい治療方法の情報を収集して提供することに努めています。

疾患によっては、新しい抗がん剤や分子標的薬と放射線治療の併用で手術と同等の治療成績が出ることがわかってきましたし、手術する場合も縮小手術にして術後放射線治療を行うことでQOLを維持することが可能な場合もあります。そのため、当科は他科の医師との合同カンファレンスに参加し、日頃から連携を密にして、患者さんに優しい治療をめざしています。

治療の方法も、周辺部位への被ばくを最低限に抑えてがん病巣だけを狙い撃つ定位放射線治療や強度変調放射線治

療などの高精度放射線治療を積極的に実施し、副作用低減に努めています。治療が高度になると、医学物理的な放射線の品質管理や適正な機器の運用がより重要になります。当科では日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会放射線治療専門医のほかに、品質管理を行う放射線治療品質管理士、照射を担当する放射線治療専門放射線技師、診療放射線技師、看護師などがチームを組み、毎週、カンファレンスを行って、治療の安全性向上を図っています。

また、他院からのご紹介も積極的に受け入れており、ご紹介いただいた先生と緊密に連絡を取り、患者さんにとってのより良い治療をめざしています。米国に比べて日本ではがん患者さんが放射線治療を受ける割合は少ないのですが、患者さんに対する選択肢の一つとしてお考えの場合は、遠慮なくご紹介・ご相談ください。



さまざまな分野の専門家がチームとなって治療に取り組む



高精度な治療装置を積極的に取り入れている

## 緩和ケア科



緩和ケア科 部長  
鈴木 規仁

1995年日本医科大学卒業後、同大学付属病院麻酔科入局。同大学千葉北総病院、三井記念病院を経て、2005年から同大学付属病院ペインクリニックでがん疼痛患者を診察。2007年の緩和ケアチーム発足に参加し、2012年から現職。

### 早期から緩和ケアに関わり トータルにがん患者の苦痛軽減へ

POINT  
1

医師、薬剤師、看護師など多職種が  
患者をサポートするチーム医療

POINT  
2

身体的疼痛はもちろん精神的、社会的  
そしてスピリチュアルな苦痛も緩和する

POINT  
3

初期段階から主治医と併診し  
常に患者に寄り添う医療を推進

### 疼痛管理のスペシャリストの下 広い受け皿と専門性の高い緩和ケアを提供

がん診療連携拠点病院の指定を受けている当院では、がんが見つかった患者さんに対して、早い段階から緩和ケアを行うことに力を入れていきます。身体的な疼痛はもちろん精神的な不安や抑うつ症状、家族や仕事、経済的な問題などを含めた社会的なストレスや苦痛、さらに後悔、自責、恐怖、生き方への想いなどスピリチュアルな苦痛を和らげることをめざしています。

基本的には、治療を考える臓器別診療科の主治医と併診する形を取り、疼痛緩和や精神ケアなどに精通した医師、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカーが緩和ケアチームを組んで、患者さんの症状緩和を図っています。

近年は外来通院でがん治療を続ける患者さんが増えてきました。そこで当院では、入院中のがん患者さんだけでなく幅広く対応するために、緩和ケアの専門外来を開設。

治療に関しては臓器別診療科の外来で聞き、それ以外の困り事はすべて緩和ケア外来で相談できるよう体制を整えました。これにより患者さんは身体的疼痛を治療するほかに、例えば足がむくんだ時に靴下をはいているのがつらい、味を楽しみつつ、無理なく食べられる物はないか、といったさまざまな悩みを相談できます。

### 自宅で穏やかに過ごしたい 患者の希望をかなえるため 在宅での緩和ケアにも対応

当科の鈴木規仁部長は疼痛管理を専門とすると同時に、日本ペインクリニック学会へインクリニック専門医の資格を有し、現在は麻酔科・ペインクリニックにも在籍しています。鈴木部長の下、CTガイドによるブロック注射など、急性期病院ならではの疼痛治療も実施しますが、最近増えつつある在宅療養を希望する

がん患者さんに対しては、医療用麻薬では内服剤や貼付剤、在宅用ポンプの持続注射を使うなど、在宅移行と在宅で診療する医師との連携を常に念頭に置きながら調整することが多くなっています。また転院にあたっては、転院先の看護師、訪問看護を行う看護師と医療用麻薬などの薬剤について相談することも当たり前になっていきます。地域の先生方が疼痛管理を行う機会も増えてきていると思いますが、お困りのことがあれば、遠慮なくご相談ください。



早い段階からの緩和ケアに力を入れ、チーム全体で患者とその家族を支援している

## がん診療科



がん診療科 部長

真々田 裕宏

1987年日本医科大学卒業。2013年10月より日本医科大学付属病院がん診療センターがん診療科部長に就任。日本外科学会外科専門医、日本消化器外科学会消化器外科専門医、日本肝臓学会肝臓専門医など。専門は消化器外科。

### 患者を迅速に診療し がんの早期発見を図る外来部門

POINT  
1

がんの早期発見・早期診断の窓口として  
がんが疑われる患者を幅広く診療する

POINT  
2

大学病院の高精度な検査をスピーディーに提供  
面談を通して結果を丁寧に説明

POINT  
3

各科と緊密に連携してさまざまな検査を行い  
がんと診断したら迅速に紹介

### 内視鏡検査やPET検査など さまざまな検査がスムーズに受けられる

がん診療において早期発見が非常に重要であることは言うまでもありません。当院は平成20年に地域がん診療拠点病院に指定され、がん診療センターを開設しましたが、その中で当科は特にがんの早期発見・早期診断を目的に開設された外来診療部門です。

患者さんの9割は提携する健診センターからの精密検査依頼で来られた人で、最も多いのが便潜血陽性、次が腫瘍マーカー高値、胸部陰影。残りの1割が、地域の病院・診療所から紹介された、がんが疑われる人です。特に原発臓器は不明でもがんを疑うような場合、PET検査なども含めて精密な検査と診断を依頼されるが増えています。

当科は、がんを診断を受けた人だけでなく、がんの疑いがある人を幅広く診療しています。かかりつけの先生方のもとに、がん検診で要再検査の結果が出た患者さんや、が

んを疑うような患者さんが来院されることもあると思いますが、当科を早期診断の窓口と考えて気軽に紹介ください。大学病院ですので高精度な検査や先進的な検査が可能であり、各診療科と緊密に連携し、あらゆるがんに対応できる体制が整っています。

検査までの待機期間が短いことも特徴です。例えば、便潜血陽性の患者さんなら、初診から早ければ2〜3日のうちに大腸内視鏡検査が行えます。当科を窓口として、PETを含むさまざまな検査や疾患の診療がスムーズに受けられる体制を整えています。

がんの診断が出れば当日中に担当診療科に紹介し、がんでなかった場合でも、当科の医師が必ず面談。がんではないのに、なぜ腫瘍マーカーが高かったのかといった説明によって、安心していただくとともに、その後の検診継続を動機付けしています。

### <診療実績>

#### ・平成27年(1~12月)実績

総受診者数： 2,225名 (月平均 185.4名)  
うち初診者数： 931名 (月平均 77.6名)  
紹介率： 97.9%



患者が安心して受診できるようにがんの早期発見・診断に努めている

## 栄養科



栄養科 科長  
石井 弘幸

1982年日本医科大学付属病院に栄養士として入職。1993年から2008年まで日本医科大学付属千葉北総病院に勤め、2016年から日本医科大学付属病院栄養科長に就任。安心・安全な病院給食提供を心がけている。



上：調理の効率化だけでなく、衛生面も徹底している 下：四季折々を感じることが出来る行事食のカード

POINT 1 ニュークックチルの導入で温かくておいしい食事を安全に提供

POINT 2 月300～350件の栄養指導を管理栄養士が2名体制で実施

季節を感じられる行事食で入院患者の心を癒やす配慮も

当院の食事はニュークックチルで提供しています。これは2～3日前に事前調理し、急速冷却してチルド状態で保存した食事を、出す直前に配膳車の中で食器ごと加熱する方法。直前加熱のため温かい食事が出せ、事前調理で調理師の負担を減らせます。2～3日分をチルド状態で保存しているので災害時の食事提供にも貢献しています。

また食材の搬入・点検時の温度、調理・冷却時の中心温度と時間、細菌の検査も定期的に行い、衛生管理を徹底。月に2回程度は季節のカードを添えた行事食を提供し、少しでも季節感を味わえるようにしています。

当院の栄養相談は日曜を除き毎日2名体制で管理栄養士が担当。1回当たり30分以上かけ、月に300～350件の栄養指導を実施していることも特徴です。退院後も長く続けられる食習慣を提案しています。

## 看護部



看護部 外来師長  
棕本 郁子

1995年日本医科大学付属病院入職。内科病棟を経て、2007年に外来勤務へ。看護係長として2014年のユニバーサル外来立ち上げに参加。2016年外来師長となり全外来を担当。



上：中央処置室。体調の悪い患者は診察まで待機することも可能 下：看護師は幅広い知識を持っているので、気軽に相談を

POINT 1 診察室、処置室を共有するユニバーサル外来で待ち時間短縮

POINT 2 診療科や職種間の壁がなくなり患者中心の医療が実現

処置室では担当看護師による手厚いケアで患者をサポート

当院の外来では、診察室や処置室を診療科ごとに固定せずに共有し、状況に応じて柔軟に使用する「ユニバーサル外来」を採用。限られた診療スペースや人材を有効活用し、待ち時間の短縮にも役立てています。外来の看護師も日々、さまざまな診療科の外来を担当する形になり、20科近い診療科のスキルを覚える必要があり当初は混乱しましたが、今ではスキルアップしてスムーズに運用できるようになりました。

また、診察室の物理的な近さから、医師達は診療科を超えて常に連携するようになりました。看護師も同様で、以前は他科の医師に遠慮することがありましたが、今では、どの医師にも遠慮せずに依頼や相談をします。一方、中央処置室では患者さんごとの担当看護師を決めて、患者さんが看護師に声をかけやすい環境を心がけています。

## 新人紹介



### 患者さんの気持ちに寄り添って サポートできる薬剤師になりたい

#### 薬剤部／風間彩

私は学生時代、実習で当院を訪れ、特定機能病院でありながら医療者が患者さんに寄り添う気持ちの強い病院と感じて入職を決意しました。私も病棟などで患者さんとしっかり対話を重ね、サポートする薬剤師になりたいと思います。今は直接、患者さんと接する部署ではないのですが、先輩たちは患者さん一人ひとりの存在を常に考えながら仕事をしています。私も早くそうなれるよう日々勉強中です。

### オールラウンドなスキルを身につけて エキスパートをめざす

#### ME部／双田幸希 鈴木美凧子 山口優佳

医療機器を管理するME部には3人が入職。オールラウンドな医療機器のスキルを身につけるため、短期間のローテーションでさまざまな業務を経験中です。覚えることが多くて大変ですが、やりがいは大きいです。「将来は手術・ICU機器のエキスパートに」、「早く一人で危機管理ができる技士に」、「患者さんの状態を見て的確な判断ができる技士に」とそれぞれの目標に向かって頑張っています。



### 患者さんの生活面を重視し 地域とのつながりを大切に

#### MSW

当院は、患者さんからの相談や医療連携の窓口となるMSW（医療ソーシャルワーカー）が充実しています。私たちはそれぞれ年齢や経験は異なりますが、今春、一緒に同期入職しました。当院には患者さんの生活面と地域とのつながりを重視する医師や看護師が多く、驚いています。私たちもその思いを忘れず、力を合わせて、患者さんや地域の先生方に必要な情報を十分に伝えられるように努力します。

